

# 台湾の社会構造

川 口 幸 穂

## は じ め に

社会構造理論には様々な定義、方法論があるが、下田直春の意味連関の二項対照性理論を基礎にして台湾の社会構造を分析した。彼によれば、それぞれの民族のもつ、「文化の型」に見られる、文化の価値の根幹を「社会構造の核」とし、その核を包有する支配の構造をウェバーの理論によって統一し、そして支配の中に見られる「支配」と「被支配」の役割連関を、レヴィ・ストロースの二項対照性理論によって明確にしたものである。台湾の核になるのは、宗族制度である。これについては、牧野巽が『中国の家族研究』で、展開している説を応用した。これは、日本の家制度について説明されたようなものである。その他経済政治構造、経済構造については、末尾に挙げた参考文献を基礎にしたものである。枚数が制限されているので、詳細な説明ができなかったのであるが、台

湾の社会構造についての所説は少し明らかにできたと思う。

## 一、三民族の成層社会と結合状態

台湾は、「外省人」「内省人」「高砂族」の三民族の成層社会を形成している。ここで問題となるのは民族の定義の問題である。

河村十才穂「民族と国家」の定義によると、民族は主に(1)人種、(2)地域の共住、(3)<sup>1)</sup>言語の共有、(4)文化の共有が、重要なポイントとなる。<sup>1)</sup>高砂族(正式には山胞<sup>サンパウ</sup>)を除き「内省人」も「外省人」も、民族的には、何の差異もない。(1)～(4)まで、この両者は共通である。一七世紀初頭まで、台湾島は少数の高砂族が住むだけの未開地であった。

この島に一七世紀初頭から第二次世界大戦前までに中国本土から移住してきた、中国人が「内省人」である。第二次世

界大戦後、中国大陆の共産化により、毛沢東との戦争に敗れた蒋介石の率いる「国府軍」は、台湾に亡命し、それと共に共産化を恐れた一般人の中国人を「外省人」と呼ぶ。<sup>(2)</sup>「外省人」は、国府軍の武力を背景として、現在の台湾を掌握している。「外省人」も「内省人」も民族としては同様であるが、両者の間には越え難い経済的・社会的な対立が現在でも続いている。<sup>(3)</sup>

台湾という運命共同体に属しながら、常に絶えざる葛藤が存在する。「内省人」にとって先祖から開拓してきた土地を「外省人」に強奪された形になる。事実、内省人の零細農民から、前近代的な物納制を中心とした米糖搾取が行なわれていた。<sup>(4)</sup>

この「内省人」と「外省人」の葛藤の中心は、「歴史的・経済的な立場の差」を根幹としている。内省人の社会を、基本的な構造とすると外省人の社会は、適応的な構造である。社会勢力の観点から見れば、一見「外省人」の社会が基本的な構造のように思考されるが、外省人の掌握しているのは政治権力（公業も含む）に限定される。<sup>(5)</sup>国府軍の武力を背景として、外省人は権力を掌握しているものの、内省人の社会が機能を停止すれば、外省人だけでは社会的、経済的に国家を維持していくのは不可能である。人口の観点だけでも「外省人」の人口は、約二百万、内省人は約一千万人である。国府

は、内省人の不自由な直接的生産者から、剰余労働を強奪する経済外強制（*ausserökonomischer Zwang*）を行ない下部構造としている。<sup>(6)</sup>

このように台湾人とは何かを定義すれば、「外省人」（集団の規模は小さいが権力を持つ集団——南阿の白人に値する）に支配される内省人（集団の規模は大だが、権力をもたない集団（*mass subject*）『被抑圧大衆』の総唱である）。

台湾に対する国家意識は「外省人」と「内省人」では、大きな差異がある。具体的に述べる内省人にとって、台湾は生まれ故郷であり自己の帰属する国家である。これに対し、外省人にとって台湾は仮の宿であり、中国本土が故郷である。

集団には「同」と「制」の二つの要素があり、「同」とは共同の対象的なものに対することによって起こる人々間の自我意識の自然的融合であるが、「制」は意志の間の対立と緊張を含んでいるものである。<sup>(7)</sup>これによれば、三民族は経済・国家防衛の観点では、「同」の自我意識の自然的融合を含みつつ、「制」の意志の間の対立と緊張がある。

## 二、台湾社会の構造の局面

台湾の文化の中心核（*core*）になっているのは儒教思想であり、儒教思想の中から派生した宗族である。儒教思想の一方の特徴は現実的であり、現世の秩序と因襲を認めることで

あり、他の特徴は、聖と俗を区別しないことである。

儒教は、キリスト教や仏教と異なり、聖職者や宗教組織はもたないが、教団組織や社会制度のかわりに「家」という具体的な社会上、政治上の広い組織を發展させ儒教の世界観を家族主義あるいは、「家」信仰と見られる。

儒教の「礼」の教えは、台湾人の内面の行為主体の要因（関心、態度、願望、観念）に同一視されるほど、パーソナリティに内面化されている。つまり台湾人にとって儒教とは、クラークホーンという「望ましいもの」(the desirable) のなのである。

「外省人」(国府)は望ましいもの(反共産主義政策)を強調することにより、自己は常に正義であり、天道の「礼」を守ることになる。台湾人における個人または集団が抱く、明示的または暗黙の価値判断の総体である価値意識 (value consciousness) にも、かなうことである。行為(台湾人)は自己の内部の価値意識に基づいて、対象(政治)のうちに価値を認めたり、行為の方向(政策決定)を決定している。言わば、国民党の政策は、台湾人の価値に適合している。

具体的に述べると「一般化された信念の名(反共産主義)において、価値を復興(中国本土の自由化)防衛(台湾防衛)変革、創造しようとする運動政策」を国府はとっている。「外省人」(国府)の政策に、内省人は従がわざるを得ない。

台湾人(内・外省人)にとって、反共産主義は共通の価値の体系をもっているものである。自由主義(価値)と国民党協力(態度)は、一組の刺激-反応の綜合体を形成しており、「内・外省人」は社会過程(social process)を通じて共通の価値を形成する。

台湾人に分有された価値の体系は、台湾の儒教を中心にした文化型に対応している。家族主義または家信仰において国府(外省人)は「父」に相当し、礼を行使する代行者なのである。「父」に「子」(内省人)は服従せざるを得ない。儒教思想から生まれた「宗族」の制度は、家父長制が中心であり、家父長制度は中央集権制度・封建制度へ通ずる要素が強い。

台湾の社会構造を明確にする、社会構造の方法論としてレヴィ・ストロースの構造主義理論を応用するものとした。その中でも、特に二項対照性理論を、台湾の社会構造において応用するものである。レヴィ・ストロースによれば、社会とは意味の世界であり、社会的事象の意味は、その事象と関連しあっている諸要素との意味連関の統一的世界を離れては把握しえないとしている。

台湾人の認識の対象として、儒教思想における「天」と「地」がある。「天」は、あらゆる事物を超越する超越神であり、絶対神でもある。これに対する間接呈示的関係である

「地」は、現世であり浮世でもある。そして、社会全体の中での社会関係として、「内」と「外」がある。

二項対照的認識についての「内省人」と「外省人」の「内」と「外」である。これは認識としては、絶対的対立の概念ではなく、相互移項関係である。台湾社会は、この二つの二項対照的意味連関の統一体として成立するが、もっと、これを見当してみると、実は台湾社会には、この意味連関が、社会的相互作用のあり方に一定の持続的なパターンを与えるものとして定型され、制度的に構造化されていることに気がつく。すなわち社会の構造も、自然界の構造を認識する場合と同じように、その意味連関の二項対照性と二項対照的意味連関の連鎖に注目して、それらが定型化され制度化された連関として認識することができる。

台湾の「社会構造の核」になっているものは「宗族」である。<sup>(8)</sup> 宗族は、絶対的家長制度に基づく、儒教を根幹とした家族制度である。二項対照的意味連関とは「家長」と「幼卑」である。家長は幼卑を「養うもの」「敬われるもの」であり、幼卑は家長に対して「養われるもの」「敬うものである。家長は幼卑に「仕えられるもの」であり、幼卑は家長に「仕える」ものである。そして宗族は、このような二項対照的意味連関が、儒教思想によって媒介されて結合しあっている。ここの「家長」の意味は、「幼卑」の意味を前提としている。

台湾社会の中における、ミクロ的な「家長」と「幼卑」の関係は社会構造におけるマクロ的な「内省人」と「外省人」における「内と外」の関係にあてはまるものである。つまり「家長」と「幼卑」の関係は「外省人」「国府」||「家長」と「内省人(幼卑)」のマクロ的な二項対照的意味連関においてなりたつものである。

人間の会話においても、「話して手」と「聞き手」があるように、その役割は「能動の形」とそれに対応する「受動の形」がある。この二者の型とも言うべき、役割の型といったものが、社会においても存在すると思う。では台湾の社会において、この固定化した役割の型は、どのような型で存在するだろうか。それが前述した外省人(家長)と内省人(幼卑)の関係である。

このマクロ的「核」における「内と外」の関係は限定的移項関係であり、相互的移項関係ではない。内省人と外省人の支配関係が入れ替るとか、主従関係が消滅し、並列的になるということは、現在の状況では不可能である。これを経済構造で見れば、内省人の社会が根幹であり、台湾の産業の根幹である内省人農民が、「下部構造」となっていることは言うまでもない。これに対し、外省人は、政治権力(国府軍の物理的強制力を背景とした)をもち、公業(基幹産業の独占)による、私業(内省人企業)の搾取といった形態を見ると、

上部構造であることはまちがいない。外省人と内省人の関係は以上の社会構造①上部構造と下部構造、②搾取と被搾取、③生産と非生産、④支配と被支配、の四つの関係になる。

### 三、内省人の社会構造と外省人の社会構造の比較

内省人の社会構造と外省人の社会構造を比較することによって、それぞれの特色を明確にし、両者の社会関係を述べるものである。

内省人の社会構造の核は、宗族であり、長幼の序を中心とする家父長制度において、家長に相当するのが、土豪、士紳である。土豪・士紳は宗族の有力者であり、彼らは、中地主、大地主でもあり、その社会的勢力は大きなものである。この土豪、士紳達は、正当の支配を維持してきた。正当の支配とは、二項の間（土豪・士紳と零細農民）で、他方（零細農民）が、自己の意志に反しても、それに従がう義務を負う関係が、正当な秩序として形成されている状態のことである。

支配するもの（土豪、士紳）と、支配されるもの（零細農民）とが、儒教による「家長制」を、媒介的契機として結合し、権力関係の非対称性を正当なものとして、承認しあっている状態を言う場合である。「正当の支配には、一定最小限

の服従意欲」を支配関係の目やすとしているが<sup>(9)</sup>この根元は、儒教思想による「長幼の序」を根幹としている。ウェバーはこのような支配の成立根拠を「正当性の信念 (Legitimitäts glaube)」に求めたが、「儒教思想」が、台湾人にとって正当性の信念にあたる。

さらにウェバーは正当性の支配を「合法的支配」「伝統的支配」「カリスマ的支配」の三類型に分類したが（土豪、士紳）と零細農民の関連は、伝統的支配に相当する。日本の封建制度、あるいは、第二次大戦以前の地主と小作関係のように、台湾人にとって、地方の有力者である土豪、士紳に対しては、従属の無意識な心理が、はたらく、権威あるいは威光といった抑圧感を抱くのである。戦前の天皇に対する日本人の忠誠心と相似的なものと考えられる。

台湾において、勢力をふるう土豪や、士紳達は、パール・バックの『大地』で見られるような、地方の農民達と、直接的に結びつき、家父長制度の家長として、その富と権力を一手に集中していた。台湾の農地改革以前は、家産制が色濃く残存して、まるで、江戸時代の地主と小作のようであった。現在では、大地主が解体され、地作農が増加したが、まだまだ身分的支配が見られる。内省人の社会構造が二百年の歴史を経て、家産制支配における身分的支配を形成したのに対して、外省人は、わずか三十五年の歴史しか経ていない。単的

に言へば、清朝の制度が移項し、台湾に定着したと言つて良い。「清の政治構造は、少数の満州人による、中国人支配である。清朝は、その支配の基礎を八旗の軍事力においた。」清朝の政策と国府の政策は、ここでは詳細しないが、相似していると言つてよい。<sup>(10)</sup>

外省人の社会も宗族が「ミクロ的核」そして家産制支配が、中間的核である。そして、中間的核の家産制を包有するのが、清朝時代の政策を踏襲した近代的官僚制支配である。

外省人と、内省人の社会構造の差は、この近代的官僚支配であり、これを除けば形態上の諸特性間において相似である。無論、この近代的官僚制が、「内、外省人」両者を、支配するのであるが。この両者の集団においては、絶えざるコンフリクト (conflict) が存在する。外省人の内省人への支配は、前述した如く正当支配ではなく、強制支配の典型的なタイプである。強制支配の構造とは、服従者の服従意欲がないにもかかわらず、支配者の絶対権力、ないしは、暴力、場合によつては、強大な軍事力によつて有無を言わず服従せしめる場合の構造である。

内省人は、外省人の権力を恐れて、ただ服従している場合が多く、内部的な反抗を、緩和する社会的装置を欠く支配体制であり、権力を頂点に集中させ、寡頭制への傾向が、強くなればなるほど、大衆 (内省人) にとつて強制的抑圧の機構

の可能性が大となる。

国府は、前述してきた、中国思想の核となるべき儒教思想における家父長制度まで利用した。国府はまさに家長であり、内省人は幼卑である。家長が幼卑に何をしようが幼卑は反抗できない。これが例え強制支配の構造にしても、安定済および凝固剤になっている。

社会構造を一定の規範的秩序とする考え方は、理論社会学の一つの有力な方法である。下田直春によるパーソナルの価値体系分析によれば「社会には一定の共通価値体系が制度化されていて、それを人々が、パーソナリティ体系に内面化することにより、人々の社会的行為は、その社会独自の価値志向のパターンに支配される。その価値志向のパターンが、人々の制度化された役割期待の相互補完的關係を規定する社会構造の原理である。したがって所与の社会構造は、その社会における価値志向のパターンによつて分析される。」とした。<sup>(11)</sup>

現代でも、台湾において同姓不婚の制が、現代の社会通念として生きているように、儒教思想は抜き難いものになっている。

この考え方を台湾の社会構造に応用すると台湾には、儒教思想における、一定、共通の価値体系が制度化されていて、これを人々がパーソナリティ体系のうちに内面化することに

より、(台湾人のパーソナリティの特徴は、権威主義的パーソナリティである。)人々の社会的行為は、家父長制度を中心にした価値志向のパターンに支配される。この家父長制のパターンが、人々の制度化された役割—外省人の場合は、国府による外省人の抑制、支配、内省人の場合は、国府に対する労働の奉仕、期待—外省人の場合は、内省人への国府への従属と、労働による国家財政の増収、内省人の場合は、国府による内省人に対する優遇と労働に対する高額の奉酬の相互補充関係を規定する—社会構造の原理である。内省人が、外省人の支配に甘んじているのは、まさしく、この原理が制度(人々が社会的に関係し、結合しあう場合の一定の行動様式の背後にあつて、相互主観的に承認された、場合によつては無意下に行っている意味連関のあり方の原理をいう。)として持続されているからである。この制度が、台湾の社会構造の凝固済になっている。このことを言い直すと、(1)内省人と外省人の主従関係を基礎として、(2)この主従関係の上下の二項連鎖によるヒエラルヒー的派閥の集団を形成し、(3)その「内・外省人」集団が、宗族の家父長的権力によつて統制された(4)家父長的大家族を形成しているのである。これは、戦前の天皇を父とし、国民は天皇の臣民であるという日本の旧天皇制度に相似的である。

## 総括と結論

常にコンフリクトが存在する相似的な二集団において、儒教思想における家長と幼卑の二項対象が、主と従の意味連鎖を形成し、反発、分離しようとする二集団を、反共のイデオロギーが、凝固剤となり連鎖し、公業に癒着する私業(内省人における土豪、士紳の土着資本)が、経済的ジョイントの役目を果たしている。この二集団を、中国文化が包有し、この中国文化をまた包有するのが、台湾国としてのテーゼである。

### 註

- (1) 河村十才穂「民族」「民族と国家」(講座社会学)人種—五頁 地域の共住—八頁言語の共有—十頁 文化の共有—一三頁 この共通のテーゼは、台湾の独立と中国の支配から自国を防衛することである。国際関係から見れば、ソ連、中国といった共產主義と、アメリカ、日本・E.Cといった資本主義の狭間に位置し、資本主義大国は、台湾を軍事現に重要ポイントとし、資本投下軍事援助により、台湾の的体制を維持することに努めている。これらの要素が、からまり相互作用されることにより、現代の台湾の社会構造を維持している。

- (2) 鈴木明『誰も書かなかった台湾』サンケイ・ドラマブックス 昭和五十四年 一六—一七頁

(3) 鈴木明 同右 サンケイ・ドラマブックス 一八一頁

(4) 劉進慶『戦後台湾経済分析』東京大学出版会 一三六頁

(5) 劉進慶 同右 九六頁

(6) 劉進慶「台湾における国民党官僚資本の展開」『思想』岩波書店 第五九一号 昭和四十八年 二七頁

(7) 蔵内数太『社会学』培風館 昭和五十二年 一八八頁

(8) 下田直春によれば、「核」とは「社会構造の基本形態は二項対照意味連関の文脈にある、社会的地位と他の社会的地位との対関係によって成立される。我々は、このようにある社会的地位と他の社会的地位との対関係をなした二項対照の意味連関を社会構造の核という」である。下田直春『社会学的思考の基礎』新泉社 昭和五十四年 三〇二頁

(9) 同右 三二七頁

(10) 『世界大百科辞典』平凡社「清」の項

(11) 下田直春『社会学的思考の基礎』新泉社 昭和五十四年 二九頁

## 参考文献

1 木内信胤『現代の台湾』世界経済調査会 昭和三十六年

2 若菜正義『蔣経国時代の台湾』教育社 昭和五十二年

3 黄昭堂『台湾民主国の研究』東京大学出版会 四十五年

4 江丙坤『台湾地祖改正の研究』東京大学出版会 昭和四十九年

5 戴国輝『台湾国際政治史研究』法政大学出版局 昭和四十六年

6 涂昭彦「日本統治下における台湾植民地経済」『思想』岩波出版

五七六号 昭和四十八年

7 山辺健太郎『現代資料21・22台湾』みず書房

8 戴国輝『台湾と台湾人』研文出版 昭和五十五年

9 若菜正義『明日の台湾』清美堂 昭和四十八年

10 鈴木明『続・誰も書かなかった台湾』サンケイ・ドラマブックス 昭和五十二年

11 牧野巽『中国家族の研究』(上・下) 御茶の水書房 昭和五十五年

12 『台湾経済総合研究』アジア経済研究所、上・下巻 昭和四十五年

13 『台湾』世界経済情報センター 昭和五十二年

14 レヴィ・ストロース 荒川幾男、生松敬三、川田順造、佐々木明、田島節夫共訳『構造主義』みず書房 昭和五十三年

15 レヴィ・ストロース 花崎皋平、鍵谷明子、小川正恭、喜田村正、黒田信一郎、竹村卓二、富尾賢太郎、山下晋司、矢島忠夫共訳『親族の基本構造』上・下 番町書房 昭和五十二年

16 ハワード・ガードナー 波多野完治、入江良平訳『ピアジュとレヴィ・ストロース』誠信書房 昭和五十三年

17 吉田禎吾『文化人類学読本』東洋経済新報社 昭和五十一年

18 作田啓一『価値の社会学』岩波書店 昭和四十七年

19 青井和夫『社会学講座』東京大学出版会

20 祖父江孝男『文化人類学』有斐閣 昭和五〇年

(大学院修士課程)